

純朴〇L、ただいま恋愛指南中！

## 目次

純朴〇し、ただいま恋愛指南中！

5

番外編 世界で一番大事な贈り物

255

純朴〇L、ただいま恋愛指南中！

## プロローグ

ガタンゴトンと、もうすっかり聞き慣れた電車の音に混じって、雨の音がする。

普段は、耳に嵌<sup>は</sup>めてあるイヤホンを、今日は外していた。雨の日はいつもそうしている。雨音が自分の中の雑音を消してくれるから。

ドアの前に立ったまま、ぼーっと窓の外を見つめた。見える景色の流れる速度は、とても速い。いつもと同じ時間、いつもと同じ車両、乗り合わせている人はほとんど同じだろう。

他人を気にしたことはないけれど、毎朝見かける人の顔は自然と覚える。

一方的で奇妙な連帯感。顔しか知らない。名前も声も知らず、言葉を交わしたこともない人達に感じる共有意識。

その一方的で奇妙な連帯感に微かな変化を覚えたのは、もう半年も前になる。

車内アナウンスが次に停まる駅の名前を放送した時、胸が小さな、本当に小さな音を立てた。

『次はー、——に停まります。傘などのお忘れ物にご注意ください』

電車が、ゆっくりと駅のホームに入っていく。周囲の人に気がつかれないように、そっと深呼吸を繰り返した。

電車がホームに入り、プシューと音を立てて停車した。

心臓の音は、少しだけその速度を上げている。

乗り込んできた人の中に見つけた、その人の姿。いつも感じていた連帯感に起きた小さな変化の正体だ。顔しか知らないのは同じだが、彼は他の人とはちよつと違う。

着ているスーツはびしょとしていて、シャツにはちゃんとアイロンをかけてある。ネクタイもきつちり締め、少し暗い茶色い髪は綺麗に切り揃えられていた。顔立ちはとても整っていると思う。

その人の姿をチラリと視界の片隅<sup>かたすみか</sup>で捉え、そつと窓の外に視線を戻す。

洗練された大人の魅力を備えた彼を目にするたびにラッキーだと感じる。

彼は雨の日は必ず、この時間のこの車両に乗り込んできた。だから運がよいといえるほどのものではないかもしれない。けれど自分にとってはラッキーなのだから、それでいいのだ。

普通なら憂鬱<sup>ゆううつ</sup>になる土砂降りの日。それは朝からいいことがあるとわかっている、気分がとても高揚する日。

窓ガラスをじっと見つめ、そこに映る彼の姿を確認する。自然と、小さく笑ってしまい、慌<sup>あわ</sup>てて口元を隠した。

## 1 晴れの日の再会

会社に着いてタイムカードを押すと、いつもと変わらない日常が始まった。坂下小毬さかしたこまりが勤めている会社はデザイン事務所だ。そこで、小毬はデザイナーとして働いている。大きくはないが、知名度もそれなりにある安定した会社だ。小毬は主に、営業の高畑たかたばが取つてくる仕事を請け負っていた。

ポスターの制作やPOP、DMダイレクティブのデザインなど、依頼内容は多岐たきにわたたり、それなりに忙しい。フライベートの時間は少ないが、とてもやりがいがあり、なんら不満はない。

小毬は出社早々、プリントアウトしたばかりの用紙をプリンターの前で確認し始める。席に戻つてやればいいものを、仕上がりを一刻も早く確認したくて、いつもそこで見てしまう。

集中してデザインを見つめている小毬を現実に引き戻したのは、高畑の声だった。

「――坂下あー、これ、こないだの依頼！ あれ先方からOK出たから」

「あ、了解です！ 直しはなかったんですか？」

慌あわてて顔を上げると、高畑が笑みを浮かべながら手を振っていた。

歩み寄ってきた彼は小毬に大きめの封筒を手渡して、時計を確認する。この後、外に出る用事があるのだろう。

「うん、あれでいいつてき。んで、これが次の仕事。今日、先方と午後に打ち合わせするんだけど、お前外出れる？」

小毬は自分のロッカーの中身を思い浮かべて、小さく頷うなずいた。

「……大丈夫です。ロッカーにスーツ入ってるんで……。あ、でもワイシャツなかったかも……。問題ないですかね？ この書類は、その依頼の概要がいようですか？」

「今回の企画書な。一とおりのことは書いてあるから。服はまあ、中がワイシャツじゃなくても大丈夫だろ。お前はクリエイターって立場だし。じゃあ午後、よろしくな」

「はーい。了解です」

「胸張れよ、坂下。なんと、ここ、社長直々に、お前をご指名なんだから」

「……は？ ご指名？ 高畑さん、何言ってるんですか？」

「まあ詳しい話は後でしてやるよ！ 俺もう一件回るんだわ。じゃあな！」

「え、あ、ちよつと！」

慌ただしく外に出ていった高畑の背を見送って、小毬は自分の席に戻った。席を離れていた時間はそれほど長くないため、ディスプレイはまだスクリーンセーバーに切り替わってはいない。プリントアウトしたデザイン画を一旦デスクに置いて、小毬は受け取った封筒を開いた。

中に入っていたのはレジュメと、A3サイズの用紙に印刷された、ピアスやネックレスなど、可愛らしいアクセサリーのポスターだ。ポスターは数年前に作られたらしい古いものだった。

それらに目を通し「アクセサリー系の会社か」と頭の中に入れる。

「あれー？ これってシンデレラ・ハウスのじゃない？ 小毬ちゃん、なんでこのポスター持っているの？」

「春日さん」

後ろから声をかけられて、小毬は顔を上げた。

そこにいたのは仲のいい先輩の春日希美だ。小毬の顔に自然と笑みが浮かぶ。

小毬の座る椅子の背もたれに腕をかけて、後ろから覗き込んできた彼女は、「へー」と呟いた。

「シンデレラ・ハウスから仕事来たんだ。小毬ちゃんが担当するの？」

「そうみたいです。……なんか先方からご指名って。ここ、そんなに有名なんですか？」

「有名なんですかって、知らない小毬ちゃんにびっくりなんだけど。女の子にすごく人気があるアクセサリーブランドじゃない。なんで知らないの？」

「えっ」

たじろいでしまったのは、希美の視線が鋭くなったからだ。

確かに自分はアクセサリーや服などの流行に疎い。そしてこの先輩は、そういう小毬の意識に対してとても厳しい人だった。

「小毬ちゃんねえ、仕事大好きなのはいいけど、もうちょつとさあ、なんかこう、色気とかさあ。

恋愛とかそういうことに目向けなさいよ、もう。女の子なんだし、何よりクリエイターのように流行を知っておくのも仕事のうちよ」

「す、すみませーん……」

紙の束でポコッと頭を叩かれて、身体が竦む。

こうなった希美はとても話が長くなる。それを知っている小毬は、早く話題を変えるのが得策だと、彼女が言葉を続ける前に「あの！」と声を上げた。

「勉強不足で申し訳ないんですけど、……ここ、どんな会社なんですか？」

「———どんな？ どんなんて言われても……主力商品は女性向けのアクセサリーよ。ピアスとかネックレスとか、指輪とか。ただ、最近は服とか、アパレルにも進出してるわね。メンズ服も人気あるんだって。設立されたのは確か五年前くらいじゃなかったかな。一気に業績伸ばして、今じゃ一流企業だよ」

「へえ……」

「社長がデザイナーなんじゃなかった？ 社長と副社長もデザイナーで、他に専属が二人いるって聞いたことあるけど」

「そうなんですか？ ……なんで私が指名なんだろ……」

それほど新進気鋭の企業なら、もっと有名なクリエイターに依頼できたはずだ。何もこんな小さな会社の、無名の小毬を指名せずともよかっただろうに。

そう口にした小毬に、希美は笑って肩を軽く叩いた。

「小毬ちゃんの作ったポスター、どっかで見たんじゃないの？ 小毬ちゃんのデザイン、あそこの会社のカラーに合ってると思うし」

「……そうなんですか？」

「私はそう思うよ。ま、頑張つて。何かあつたら高畑に協力してもらつて、先方の希望取り入れて進めてけば大丈夫だつて」

「はぁーい……」

希美の励ましは嬉しいが、それだけで急に自信が湧いてくるわけではない。

彼女は上司と呼ばれ、小毬の頭をポンポンと叩くと、席を離れていった。

「カラーねえ……」

小毬は改めて企画書を捲る。

向こうの掲げているテーマは、「雨の日でも輝く存在感」だ。新発売予定だというアクセサリーのデザイン画も載つていて、それは確かに女子なら可愛いと思うだろうものだった。

それをデザインしたのは社長らしい。公式HPの代表取締役紹介ページを見て、小毬は「ふうん……」と息をついた。

「……代表取締役、板倉終二さん……」

経歴から想像できる年齢は三十代。若くして起業できるほどの経営手腕を持っていて、尚且つデザインの才能もあるだなんて、どんな人だ。

打ち合わせには彼も同席するだろう。高畑は社長が小毬を指名してくれたと言つていた。期待されていると思うと、なんだか緊張してくる。

本当に自分でいいのか。胸を過つた不安は、考えないことにした。

小毬は気持ちを切り替えて、改めてパソコンと向かい合う。

検索エンジンに「シンデレラ・ハウス」と入力した。ヒットしたページは結構な数だ。

「これは、すぐに終えられそうにないな……」

小毬が抱えている仕事はこれだけではない。時計に視線を向けると、時間はもうすぐ十時半。

「とりあえず、今は打ち合わせに必要な最低限の情報だけ集めるしかない」と心の中で呟いて、取り急ぎのものから手をつけた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「あ、雨やみそうですね。帰りは傘いらなかな」

「おー。本当だ」

午後、高畑の運転する営業車に乗り込み、クライアントの会社へ急ぐ。

助手席に座る小毬は窓の外を見て、少しはずんだ声を上げた。これなら帰り道、雨に濡れなくて済む。

「そうそう、指名のことだけど。さつき後で説明するつて言つたろ？ あれな、俺が営業に行つてお前の名前出したら、先方がすごく驚いたんだよ。『ラインハート』の広告作つた方ですかつて」

「えっ？」

「あれでお前の名前を知つてたんだつて」

「あんな昔の!？」

小毬は思わず大きな声を出した。それほど想定していなかったことだ。驚いて目を丸くする小毬に、高畑は小さく笑って、「そうそう」と相槌を打った。

「お前がラインハート社の広告作ったの、うちに入ってたばっかの頃だから、……四、五年前だっけ？ その広告が印象的で、板倉社長はずっと覚えてたんだってさ、坂下の名前」

ラインハートは化粧品会社で、その新商品のポスターを頼まれたのは数年前の話だ。

化粧品は通常、有名な女優やアイドルを広告塔にすることが多いのだが、ラインハートはあえて、広告塔になる人物を起用していない。小毬はその会社の方針を尊重して、商品とコピーだけが入ったポスターを作った。それが当たり、その化粧品はメジャーになって、今やラインハートの主力商品なのだそう。

ポスターを作り終え、クライアントから言われた「ありがとう」の言葉が、心から嬉しかった。小毬が初めて一人で任された仕事だということもあり、今でもあの仕事で心の支えになっている。

「……そんな前の広告、よく覚えてましたね……」

「それだけ印象に残ってたってことだろ？ デザイナーとしては嬉しいことなんじゃねえの？」

小毬は聞かなければよかったと後悔した。

指名されたというだけでもプレッシャーだったのに、そんなに前から自分を知られていたのかと思うと、余計に緊張が高まっていく。

「……そりゃそうですけど。……なんか緊張して。その板倉社長って怖い人ですか？」

「なんだ怖いって。全然怖くねえよ。むしろ、女は喜びそうだ」

「は？」

信号に引っかかり、車がゆっくりと停まった。小毬は高畑の言葉に怪訝な顔をする。

「めちゃくちゃイケメン。男の俺から見てもかっこいい人だっけと思う」

「……あの、余計緊張するようなこと、言わないでもらえますか」

「なんで。イケメンと仕事できるんだからちよつとは喜べよ。まあ、もう三十六歳だっていうし、坂下とは少し年離れてるけど、そんなこと全然感じないぞ」

「そういう問題じゃないんですよ！ そんなかっこいい人と仕事したことないし！」

「普通にしてるよ。それとも何？ お前、イケメンだからって相手となんかあるって期待しちゃってんの？」

ニヤニヤとやけに楽しそうな笑みを浮かべた高畑にからかわれ、小毬は顔の温度が一気に上がるのを自覚した。

「違います！ ほら、信号青になりましたよ！ 早く出してくださいよ！」

「いてえ！」

振り下ろした拳は高畑の二の腕にクリーンヒットする。殴られた場所を擦る彼に、小毬は少しだけ溜飲を下げ、背もたれに寄りかかった。

小毬は現在、二十六歳だ。恋愛事とは随分ご無沙汰だが、彼氏がいなくても特に困らないので、焦ってはいない。

ただ、いい男との出会いがあると聞けば、想像くらいはしてしまっ。



何かあるかもしれないとまでは思わないが、こんなことがあったらいいなあ程度の願望はある。それを見抜かれたような気がして、とても恥ずかしかった。

やがて高畑の運転する車が大きなビルの駐車場に入り、停車する。小穂は小さく深呼吸をして、車から降りた。雨は、もうやんでいる。

見上げるとビルは空まで届きそうなほど高い。自社ビルではないにせよ、こんなビルのワンフロアを借りられるシンデレラ・ハウスは、かなり業績がよさそうに思えた。

会社を立ち上げてまだ数年。その短い期間で事業を軌道に乗せた社長は相当できる人なんだろうと、尊敬に似た気持ちが胸に湧く。

エレベーターで会社のある階まで上り、フロアでキョロキョロと視線を巡らせている小穂をよそに、高畑はスタスタと受付の電話に向かっている。

微かな物音しかしないシンデレラ・ハウスのフロアはとても綺麗に掃除されていた。置かれたインテリアのデザインも、センスがある。

窓の外に見える景色は絶景で、小穂は感嘆の溜息をついた。

「——えっ、出かけてらっしやるんですか？」  
少し焦ったような高畑の声に振り返る。そこにはシンデレラ・ハウスの社員らしい女性が、申し訳なさそうな表情を浮かべて立っていた。

「はい。申し訳ありません。もうすぐ戻ると思います。アポイントはお伺っておりますので、どうぞ中でお待ちください」

「わかりました。お手数おかけします。……坂下、行くぞ」

「あ、はい……」

何か問題があったんじゃないのかと少し不安になったが、高畑の表情を見るかぎりそこまで大事でもないようだ。

社内を案内されながら、失礼のない程度にその室内に視線を巡らせた。デザイン学校を卒業してすぐ今の会社に就職した小穂にとって、他社の雰囲気は興味深い。

「どうやらこの会社は、やや女性社員のほうが多いようだ。」

「大変申し訳ありませんが、こちらでお待ちいただけますか。板倉に連絡を取ってまいりますので」

「わかりました」

案内の女性は本当にすまなそうな顔をしたまま深く頭を下げ、部屋を出ていった。

小穂はどうしていいのかわからず、ポケットと突っ立ったまままだ。高畑が椅子に座つたのを見て、慌てて自分もその隣に腰を下ろす。

「……何かあったんですか？」

「社長が出先から戻ってくるのが遅れてるらしい、渋滞に嵌まったんだと。もうすぐ着くからってさ」

「ああ、なるほど……」

「忙しい人だからなあ。ま、すぐ戻るらしいし、待つてればいいよ」

「はい。……さつき案内してくれたのは受付の人ですか？　すごい綺麗な人ですね」

「あれは社長秘書の小平さん。基本的に担当は板倉社長だけど、社長が捕まらなかつたら連絡取るのはあの小平さんだから、お前も覚えとけよ」

「あ、はい」

かっこいいと評される人は、周りにいる人も美人なのか。そんな変な感想が心に浮かぶが、口には出さなかつた。

あまり雑談していても、小毬も高畑も口を閉じて、渡された企画書を眺めた。

一とおりを通してはいるが、それでも全て頭に入っているというほどではない。改めて最初から読み始めると、高畑が「そういえばお前」と小さな声で話しかけてきた。

「春日さんから聞いたぞ。シンデレラ・ハウスのこと知らなかつたんだってな」

「う……っ」

「まあ、坂下がそういうものに興味ないのは前からだし、知らなかつたのはいいとして、それ、社長に絶対言うなよ」

「わ、わかつてますよ！」

そんなことをクライアントに言えるわけがない。そこらへんの常識は小毬にだってある。

小毬が高畑を睨みつけていると、ドアがノックされ、先ほどの小平という女性がお茶を運んできた。

「お待たせしていて申し訳ありません。連絡が取れまして、今このビルの下に着いたとのことでは

たので、もうすぐ来ると思います」

「ああいえ、気になさらないでください」

「あ、ありがとうございます……」

小毬の前にもお茶を置いてくれた小平に軽く会釈をして、その湯呑にそっと触れる。

ちらっと視線を彼女に投げると目が合つて、にっこりと微笑まれた。

「私、板倉の秘書をしておりまして、小平美奈子と申します。これからお目にかかることがあるかと思いますので、よろしくお願いします」

「あつあ、えつと、花房デザイン工房のクリエイターの坂下小毬です！　こちらこそよろしく願いいたします！」

自分がかくかく普通の容姿だと自覚しているからか、ぴしつとした美人を前にすると、なんとなく居心地が悪い。

失礼にならないように挨拶をした後、小毬はそっと視線を外した。

すると、すぐにドアがノックされる。

その音に先に反応したのは高畑で、彼はすつと椅子から立ち上がった。

それを見て、小毬も慌てて立ち上がる。美奈子がすつと移動して、ドアを開いた。

「――申し訳ありません！　お約束の時間に遅れてしまつて！」

「板倉社長、気になさらないでください。事故渋滞じゃ仕方ないですよ」

「えっ……」

部屋に入ってきたその男性は少し呼吸が乱れているようだったが、そのかっこいい容姿ようせいに際まぎはない。

彼を見た瞬間、心臓が止まるかと思うほど驚いた。

小毬は彼を知っていた。正確に言えば、彼の顔を、だ。

高畑は彼にこやかに対応している。

「……坂下？」

「……あ……や、……す、すみません。なんでも、……なんでもありません」

怪訝けげんな声で尋ねてきた高畑にぎこちない笑みを向け、なんとかごまかす。そんな小毬の目を目の前にいるその人も知っているのだろう。

何しろ彼も小毬の顔を見て、驚いたように固まっている。

すかさず高畑が小毬を紹介した。

「板倉社長。彼女が社長が仰おんじやつてくださった坂下です。ラインハートの広告を手がけた、坂下小毬」

「……あなたが、坂下さん、だったんですか……」

「……初めまして、……坂下小毬と申します……」

視線を逸そらしてしまうのは、頭の中が混乱こんらんしていて、自分で整理ができていないからだ。

突然もたらされたその出会いに、小毬はなぜだかテンパっていた。

「……社長、坂下とお知り合い、でした？」

「ああいえ……初めまして、です」

確かに「初めまして」だ。それは間違っていない。ただきつと、お互いがお互いを一方的に知っていた。彼の口ぶりから察するに、それで間違いない。

「——初めまして、坂下さん。シンデレラ・ハウス、代表取締役の板倉終二と申します」

板倉終二と名乗ったその人は、今朝も同じ電車に乗り合わせた、あの雨の日の同乗者だった。

単に「雨の日と同じ電車に乗る人」だが、自分にとってはまだそれだけの人ではなかった。

恋をしていたわけではないけれど、憧あこがれに似た気持ちは確かに持っている。そんな彼が、自分を認識しんししてしてくれたのかもしれないと察して、さらに鼓動こどうが激しくなった。

今までチラチラと見ていたことまで知られていたらどうしようという焦りと、向こうも自分を見ていたのだという喜びのような感情が混ざり合い、どう処理すればいいのかわからない。

「嘘うそでしょ」という言葉はどうにか心の中だけに押しとどめただけで、漸よく始まった打ち合わせには、すぐには集中できなかった。



「——ありがとうございます」

「よろしくお願ねがいいたします」

会社の入り口で深々と頭を下げる。終二と美奈子に見送られ、小毬は高畑と一緒にエレベーター

に乗り込んだ。

エレベーターのドアが閉まり漸く全身を包んでいた緊張が解け、どっと力が抜ける。

「はあー」

「なんだお前。そんな深い溜息ついて」

「……いや……ちよつと、世間は本当に狭いんだなと思って……」

「は？」

終二を知っていたことを隠す必要はないのだが、小毬は曖昧に言葉を濁し、愛想笑いで会話を切った。

正直な話、どう説明していいのかわからない。

帰りの車中で再び溜息をつく小毬に、高畑は首を傾げる。

「そんなに緊張したのか？ 確かに板倉社長は芸能人並にかっこいいけどよー」

「そうじゃないんですけど……私、打ち合わせの最中、おかしなこと言ってますでした？」

「別に？ いたって普通だった。いつもどおり。必要最低限のことしか言わないし、聞かないデザイナーだった」

「……はあ、……ならいいんです……」

「本当変だぞ、お前」

「あああ……」

ズルズルと背もたれに深く寄りかかった小毬に、高畑はそれ以上何かを言うのはやめたらしい。

溜息一つで運転に集中し始めた。

小毬は心の中でぐるぐると考える。

板倉社長が雨の日に電車で見かける人だと言えばいいだけだ。それは問題ない。問題ないが、自分がちよつとした下心を持って彼を見ていたのだと勘繰られるのは困る。

まさか、あの人が凄腕の社長だとは、まったく想像していなかった。

ただ、雨の日にだけ、電車で顔を見る男の人。かつこよくて、雰囲気洗練されていて、視線が勝手に惹かれてしまう。それだけの人。

もしかしたら、彼と何か起こるかも。そう想像したことは何度かある。だけどそれだけだ。

それがまさか、仕事相手になるとは、思ってもいなかった。

ちよつと気になっていた人が、自分の仕事を知っていてくれて、かつ、認めてくれていたということは嬉しい。

だが、と小毬は、溜息をついた。

元々、ただ顔を知っていただけだ。知り合いでもなんでもなかった。

それが言葉を交わし、顔見知りになり、知り合いになれたのだから幸運だろう。

ただそれ以上の深い仲になるにはそれなりのきつかけが必要になる。顔見知りになるのは案外簡単でも、友達になるのは意外と難しい。ましてや恋人になるなんてそれこそ、相手の気持ちが不可欠だ。

確かに小毬は終二に憧れてはいるが、あくまで憧れだ。恋愛感情では、ない。

そう思うのに、ちよつとした失恋でもしたような気分になってくる。彼の関係が深まるきっかけが、すぐに訪れることなど小毬はまったく想像もしていなかった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

翌日、朝から降り続く雨に、小毬は電車の窓の外を眺め、小さく息を吐いた。電車はいつもどおり走っている。このまま乗っていれば、きつと柗二に会うだろう。

よくもまあ、こうも雨が降るものだ、少し憎らしい。

今まで嬉しかったこの雨も、できれば今日は遠慮してほしかった。

昨日感じた失恋に似た小さな喪失感、まだ胸にある。失ったものを言葉にするなら、ただの憧れだ。

けれどあの雨の日の電車はとても楽しかった。これからは憧れと共に淡い妄想を抱きながら、彼を見つめることができないのだ。

柗二に恋していたわけではないが、気がつかないうちに、それに似た感情を抱いていたのは確かなのだろう。

小毬はもう一度小さく息を吐いて、窓にコツンと頭を当てた。

柗二が乗ってくる駅はもう一つ先だ。昨日の今日で、彼を空気のように扱うのは無理がある。何しろ、小毬にとってはお客様だ。

それにあの人は、小毬がこの電車に乗っていることを知っているはずだ。

車内のアナウンスがその駅名を告げ、小毬の身体に緊張が走る。

いつもしていないイヤホンを嵌めていたら感じが悪いだろうと思いついていたのだが、今更ながら後悔した。

小毬はあえて開いた扉を見ないようにする。

もしかしたら柗二は小毬に気づかないかもしれない。

けれど、声をかけられたらどうしよう、そんな感情が胸の中を埋め尽くしていて、背中に神経が集中する。

そのおかげなのか、後ろに人が立ったのはすぐにわかった。

「――坂下さん」

「は、はい……………」

「あ、驚かせちゃいました？」

構えていたせいか、変に上ずった声が出てしまう。

振り返ると、柗二は少し驚いた顔をしていたが、すぐに優しく笑った。

「…………い、板倉社長……………」

「今はプライベートの時間なので、社長とは、呼ばないでいただけると助かります」

「…………す、すみません……………」

困ったような笑みに変わった彼に、小毬は慌てて頭を下げた。すると柗二はまた笑う。

彼は近くのつり革を掴み、小毬の横に立つことに決めたらしい。非常にまずい展開だ。

急に離れるのはいささか不自然だし、彼はきつと降りるまで小毬の傍を離れないだろう。

ドアが閉まり、電車が動き出すと、柗二は窓の外に向けていた視線を小毬に戻した。

「やっぱり電車の女の子、坂下さんだった」

「え？」

「昨日、俺のこと見て驚いてたから。俺も坂下さんの顔覚えてたけど、もし違ったらって、ちょっと不安だった」

「……すみません、やっぱり、昨日言うべきでしたか……」

「いや？ 昨日はお互い仕事だったから、言わないでいてくれてよかったよ。ただ、やっと話しかけるきっかけができたかなとは思って、ラッキーだった」

それはどういう意味で受け取ったらいいのだろう。柗二が以前から小毬を認識してくれていたのは確定したが、彼は話しかけるタイミングを窺っていたということか。

彼の言葉になんと返せばいいのか判断できず、小毬は結局、話を変えることを選択した。

「あ、あの……板倉さん、いつもは、電車、乗ってないですよね？」

「ああ、うん。普段は車なんだけど、電車に乗る機会、なくしたくはないなって思ってた」

笑いながら言った彼に、小毬は首を傾げた。

電車での移動より車移動のほうがストレスがなくていいんじゃないのだろうか。

「……ちよつとね、昔、電車通勤がメインだった時、憧れてた二人がいて。今はもう、違う路線に

なつちやつたから会えないんだけど」

「憧れ、ですか……？」

小毬の問いかけに、彼は少し照れくさそうに笑って、頬をかいた。

「うん、そう。憧れ。一方的に見てただけだから」

「一方的に？」

「うん。まあ、ちよつと恥ずかしいから、また今度、教えてあげる」

「え？」

「ほら、男が憧れてるとかそういうの、引いたりされても嫌だしさ」

「男だからとか女だからとか、関係なくないですか？ どんな感性持っていようと、他人がとやかく言うことはないと思いますよ。だって、何をどう受け取るか、どう読み取るか、どうやってそのものを見るのかとか、どう感じるかは人それぞれじゃないですか」

むきになって言う小毬に、柗二は少し驚いたようだ。

小毬は、物づくりをしている人だからこそ、誰かからの評価を気にせず、自分の感性を大事にしてほしいと思っている。

だが、すぐに恥ずかしくなって、小毬は視線を窓の外に投げた。

そんな小毬の態度を気にせず、柗二は話しかけてくる。

「……ねえ坂下さん。ちよつとお願ひがあるんだけど」

「え？」

振り返ると、彼はなぜか嬉しそうに笑っていた。

「連絡先、教えてくれないかな？」

「え、え……っ？」

まさかそんなことを聞かれるとは思っていなかった小毬は、たじろいでしまう。

柀二は自分の着ているコートのポケットから、おそろくプライベート用だろう携帯を取り出した。「立場のせいかな、周りは俺を特別視してくる人間ばかりで、悩みを相談できる人、いないんだ」

「は……はあ……」

「でも、坂下さんなら、俺のことを特別扱いしないで、ちゃんとしたアドバイスくれそうって、今思った」

勝手に思われても困る。戸惑う小毬に、柀二は相変わらず穏やかな笑みを浮かべたまま、「迷惑かもしれないけど」と前置きをしてから続けた。

「俺の相談相手になってくれると嬉しい」

芸能人並みにかっこいい人からの申し出を断れる人がいるなら、一度お会いしてみたい。

小毬はどこか他人事のように、そんなことを考えた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

小毬はデスクの整理整頓を心がけているが、仕事が詰まってくるとそうもいかなくなる。

幸い、本日もまだ会社のデスクを綺麗に保ったまま終わった。シンデレラ・ハウスの仕事は納期まで余裕がある。ただ、他の仕事が少しだけ詰まっていた。

後は完成品を見せて、チェックしてもらっただけなのだが、それがまた神経を使う。

この段階でも色味を変えてくれ、形を変えてくれと言われることがないわけではない。

早くシンデレラ・ハウスの仕事に入りたいのに、なかなか頭が切り替えられなかった。

どうしたもんかと悩んでいると、希美に声をかけられる。

「あれ？ 小毬ちゃんまだ帰らないの？」

「あー……ちよつとまだ、仕事が残ってて」

「へえー、珍しいねえ。まああんまり根詰めないようにねー。お疲れ様ー」

「お疲れ様です」

挨拶を返して、小毬は小さく息を吐いた。

残っている人間は、もういない。

早く帰れる時は早く帰るが合言葉の職場で、繁忙期でもないこの時期、ここ数日、残業しているのは小毬だけだろう。

なんとか前前の仕事を終えた小毬は、漸く、シンデレラ・ハウスの企画書を手にとって、パラパラと捲った。

開いたのは、今回メインで使うアクセサリーの写真が載ったページだ。ポスターのデザインに人物を使うのか他のものを使うのかは、小毬に任されている。だが、メインに載せるのはこのアクセ

サリーのセットと決まっていた。

「うーん……」

今までの仕事から意識を切り替え、写真を見ながら悩んでみても、じっくりくるデザインは浮かんでこない。

可愛いこのアクセサリーのセットにピッタリとハマるものがまったく考えつかなかった。期待されている分、期待以上のものを作りたいと気負いすぎているせいだろうか。誰もいなくなったフロアで一人、小毬は溜息をついた。

脳裏に浮かぶのは終二の顔だ。

「……熱意、ある人だったなあ……」

打ち合わせの最中、彼はこのアクセサリーについて、細々と説明してくれた。

このアクセサリーの「雨の日でも輝く存在感」というテーマは、電車に乗っている時に思いついたのだと言う。

終二曰く、雨の日のデートでも恋する女の子が頑張れるように、少しでも勇気が出せそうな、そんなアクセサリーにするつもりなのだそうだ。

彼の様子は、何か遠くのモノに思いを馳せている、そんな感じだった。

基本的には車通勤の彼が、雨の日だけは必ず電車に乗っている。その理由を憶れていた人がいたからだ、終二は照れくさそうに笑いながら教えてくれた。

そして、「このアクセサリーはその二人をイメージしてですか」と問いかけた小毬に、違うと静

かに否定した。

終二と電車でそんな会話をしてから一週間、雨は降っていない。だから、終二にも会っていない。連絡先を交換したが、彼からの連絡はない。

アクセサリーの写真をじっと見つめて、小毬は想像する。

終二のような素敵な男性が憧れる二人とは、一体どんな人なんだろう。

月とダイヤがモチーフのそのアクセサリーは、光の加減でキラキラと輝くものになるそうだ。

「……女の人、かな……」

終二は特別な女の人を思い浮かべて、これを作ったような気がする。

不意にスマホの着信音が鳴り、小毬は思考を中断された。

「あ、わ、……は、はい！ 坂下です！」

『……あ、もしもし？ 坂下小毬さんの携帯でよろしかったでしょうか』

「え？ あ、はい、そうです。え、と？」

電話の向こうから聞こえる声には、覚えがある。

今まさに彼のことを考えていたところだ。連絡先を交換したのは確かだが、まさかかかってくるとは思っていなかった。言いようのない焦りが小毬を襲う。予測していなかった事態に、心臓が落ち着かなくなった。

耳に押し当てた携帯から、潜めた笑い声が聞こえる。



『板倉です。板倉終二です。申し訳ありません、こんな時間にお電話なんかして』

終二からの電話だと改めて認識した途端、胸の鼓動がさらに激しくなる。

小毬は服の胸元をギュッと握りしめて、彼に気がつかれないように小さく息を吐き出した。

きつと、仕事のことで電話をかけてきたのだ。他に理由などない。そう自分を落ち着かせて、必死で言葉を口に出す。

「あつ……い、いえ……っ！ あ、あの、何か、ありました？ ……何か、仕様の変更でも……」

『いや、これ、プライベートの番号からかけてるんで、仕事のことじゃないんです。今、大丈夫？』

「……あ、ええ、もう、帰ろうとしていたところですから……」

本当はまだ仕事をする気だったが、そう言ったほうが、余計なことを聞かれずに済む。

小毬の言葉を聞いて、終二は電話の向こう側で小さく笑った。

『そうなんだ。こんな時間まで大変だね。もしかして、うちの仕事のこと、かな？』

「あつ、いえ、そういうわけじゃ！ ちょっと詰まっちゃってて、でももう終わりましたから！」

『そう？ ならいいんだけど。それなら、今から一緒に食事でもどうかかな』

「……食事、ですか……」

『うん。坂下さんさえよければ。電車の中でも言ったけど、坂下さんに相談したいことがあるんだ』

「え？ 相談？」

言われて思い出した。終二は小毬に相談相手になってほしいと頼んでいた。そして、小毬は断る

こともできずに連絡先を交換してしまっている。了承したと思われていたとしても不思議じゃない。

終二は小毬が彼を特別視しないと云ったが、それはまったく勘違いだ。

小毬はむしろ、終二を特別視している。だから、今も緊張のあまり気分がのらないのだ。

だが、小毬は彼からの食事の誘いを無下にはできず、流されるまま受けていた。

少し、ほんの少しだけ、終二のことを知りたいと思ったから。彼に相談相手として求めてもらえているということに、微かな幸福感があるのは否定できない。

小毬は、電車の中以外の姿を見たいと思っていた。



帰り支度を手早く済ませた小毬が待ち合わせ場所に着いたのは、電話を終えてから三十分後だった。

終二が、待ち合わせ場所を小毬の会社に近いところに設定してくれたおかげで、約束時間前だ。

改札を抜けて、少し切れてしまった息を整えながら辺りをキョロキョロと見回す。その人の姿は、すぐに見つかった。

遠目でもぱっとわかったのは、彼のその整った容姿に集まる視線のせいだ。通り過ぎる女性がチラチラと視線を投げている。

小毬はその光景に、「はは」とほのかに乾いた笑いを零した。あんなに注目を浴びるかっこいい

人の待ち合わせ相手が自分だと知られたらなんと思われるのだろう。考えると、ちよつと怖い。帰りたい気持ちに駆られたが、そういうわけにもいかず、小毬は小さく息をつく。思いきって、彼に駆け寄った。

「板倉さん！」

「あ、坂下さん。申し訳ありません、急にお呼び立てして……」

「ああいえ。こちらこそ遅くなっちゃって申し訳ありません」

「まだお約束の時間の前ですし、そもそもいきなり誘ったのは俺のほうですから、坂下さんは気になさらないでください」

「……あの、……それで、相談したいことってなんでしよう……?」

ここに呼び出された理由は、それだったはずだ。柗二とゆつくり話せるかもしれないと少し浮かれていたが、こんなに人の注目を浴びては、そんな余裕はない。

身体中に突き刺さるような視線を感じて、小毬はこの場から逃げ出たくて仕方がなくなった。

早々に本題に入ろうとした小毬に、柗二は小さく苦笑する。

「もしよければなんですけど、食事をしながらでも構いませんか？ ご馳走ちそうさせてください」

「え?」

「ここではちよつと言いくいことというか。できれば、あまり人には聞かれたくないので」

「……あ。で、ですよね……っ！ す、すみません私、そんなの全然考えてなくて!」

「いえいえ。少し歩くんですけど、大丈夫ですか?」

柗二の問いかけに小毬はコクコクと数回頷うなづいて、歩き出した彼の後ろを小走りについていく。

彼の歩く速度はさほど速くなかったので、小毬はすぐに追いつけた。彼が小毬の歩く速さに合わせてくれているのだ。

女性のことを知らなければ、これほど自然に気配りはできない気がする。

柗二はやつぱり、女性にモテるのだと思う。

小毬の胸に小さな落胆らくたんが湧く。その感情に気がついて、もしかしたら彼と何かあるかもしれないとまだ期待していたんだと自覚した。そして、そんな自分に勝手に凹へこむ。

小毬は黙って柗二の後ろを歩く。横に並んだほうがいいとは思うのだが、どうしても気後れきわくしてしまうのだ。

そんな小毬に柗二は気がつき、心配そうな顔で「どうかした?」と聞かれる。小毬は慌あわてて首を振った。

彼が選んだ店は駅からそれほど離れていなかった。

路地裏にこぢんまりとあったそのお店は、一見ただけでは店だとわかりづらい。

「ここ、俺のお気に入りなんだ。すごく美味おいしい料理出す店で」

「へえ……なんか、普通の民家みたいですね」

「俺も最初は気がつかなかった。友達に連れてきてもらって知ったんだ。入ろうか。外、寒いしね」

「え? あ、はい……」

小毬は促されるままに店へ足を踏み入れた。

アットホームな内装の店内にはお客様の数が少なく、落ち着いた空気が流れている。

「行こうか。席、空いてるみたいだし」

「あつ……は、はい！ すみません！」

初めて入る店だからか、デザイナーの性で調度品や内装に興味を惹かれ、視線があちこちに飛んでしまう。

そんな小毬が面白かったのか、柗二が小さく笑った。思わず小毬が彼の顔を見ると、彼は「ごめん」と口にする。

「いや、ポスターとか、そういうデザイン以外にも興味あるんだなって思ってた」

「……センスや雰囲気は、勉強になります。他にも色々見たりしますよ。……その、アクセサリーとか、ファッションはあんまり、詳しくないけど……」

「そうなんだ？」

案内された席は半個室になっていて、他のお客様の席は見えない。どうやら隣の席は空席らしく、周辺は静かだ。

なんだかそわそわした気持ちを抱えたまま椅子に座り、小毬は内装に視線を巡らせた。

そんな小毬とは反対に、柗二は落ち着いた様子で腰を下ろしている。二人きりになるとさらに気まずくて、どこに視線を向けなければならないのか小毬には判断できなかった。

顔を見ていればいいのかもしれないが、気安い関係の友人でも、なんとも思っていない仕事相手

でもない彼に、そんなことは無理だ。

なぜこの話に乗ってしまっただろうかという後悔が今更、胸に浮かぶ。

溜息をつきたい気持ちをなんとか堪え、チラリと視線を彼に向けて、タイミングがいいのか悪いのか、メニューを差し出す柗二と目が合った。

「なんでも好きなもの頼んで。呼び出したのは俺だし、今日はご馳走する」

「……あ、ありがとうございます……」

彼に優しく魅力的な笑みを向けられて、鼓動が激しくならない女性がいるならば是非お目にかかりたい。

勝手に熱くなる頬をどうごまかそうかと考えながら、小毬は柗二からメニューを受け取った。



「へえ！ あれが初めて手がけた作品だったんだ？」

「は、はい……」

テーブルの上には頼んだ料理が並んでいる。彼がすすめたとおり、そのお店の料理はとても美味しい。

カクテルメニューも豊富だったが、彼は車で来ているからと、酒類は頼まなかった。もちろん小毬もだ。ご馳走してもらえとはいえ、一人だけ飲んでいるのは気まずい。酒は嫌いではないが、

今夜は丁重に辞退した。

食事をしながら、ぼつぼつと話す。結局、話題は仕事のことだ。

柊二は小毬の仕事について、様々な質問を投げかけてくる。話題に困らないのは助かるが、自分の仕事内容をそこまで詳しく聞かれたことがなかった小毬は返答に詰まった。

仕事に対する拘りはある。けれど、それはクライアントに説明すべきことではない。現在進行形で一緒に仕事をしている彼にそれを語ってもいいのか判断できなかった。

どうしようかと悩みつつ烏龍茶を飲む。ちらりと携帯に視線を向ければ、待ち合わせた時刻からすでに一時間が経っていた。

「あのポスター見た時から、いつか坂下さんにうちの広告デザインをお願いしたいって思ってたんだ。けど、坂下さんの名前はわかったんだけど、連絡先がわからなくて……。だから、花房デザイン工房さんが担当したものだって高畑さんに聞いて、驚いたのと同時に嬉しくてさ。すぐ、仕事頼もうって決めたんだ」

「……あ……ありがとうございます……」

こんなふうには真正面から褒められると、照れくさくてむず痒いような気持ちになる。本音を言えば、とても嬉しい。だが、それを素直に表情に出すのはどうにも躊躇われた。

しどろもどろになりながら話を逸らそうと考えるが、勢いのついた柊二の話を止められる話題が思いつかない。

小毬は照れて火照ってしまったっている頬をどうにもできないまま、顔の前で両手を振った。

「も、や、やめてください……。そろそろ私、褒められすぎて溶けそうです……っ」

「え？」

「だ、だつてほら、きよ、今日はこんな話するために来たわけじゃないじゃないですか！ 私そんなに褒められ慣れてないし！……そ、そうだ、相談！ 今日板倉さんの相談事、聞くためにって言ってたじゃないですかっ！」

「あ、うん。……ごめん、そうだったよね。俺、本題も話さないで時間使っちゃったな」

「……いえあの……ほ、褒めてもらえたことは、嬉し、かった、です……」

「……そう？」

柊二に優しく笑われ、頬の熱がさらに上がったような気がする。だがその言葉に流されて、また本題から逸れても困る。

小毬は意を決して顔を上げた。

「それで、あの！ 相談って……？」

「うん……、あの、すごく言いにくいんだけど……できれば、引かないでくれるとありがたい、かな」

「……引く？」

「うん。ほら、イメージじゃない、とか……」

そう言う柊二の表情はどこか寂しげで、どうにも放っておけなくなった。

今の小毬は柊二のことをそれほど知っているわけではない。確かに淡い憧れを抱いていたが、そ

れは自分が勝手に抱いていたイメージに対してだ。彼が想像していた人物と違うからといって身勝手に落胆するつもりはない。

彼がどんな悩みを抱えているのかは知らないが、おそらく引くことはないだろう。

戸惑いながら「はい」と小さく頷くと、柗二はほっとしたように微かに笑った。

「ありがとう」

「……お礼、言われることなんですか？」

「俺にとつてはね」

「え？」

「俺さ、……女心、わかんないらしくて」

「はい？」

一瞬、聞き間違いかと思った。

引いたわけじゃない。ただ純粹に、彼の言葉の意味がわからなかったのだ。

「……俺に、その、女心、教えてもらえないかな……？」

女性の扱いに長けていて、見た目のいいこの人が、女心がわからないなんて本当だろうか。

小毬は彼の言葉にどう返事をすればいいのかまったくわからなかった。

## 2 想像と現実

「……はあ……」

ガタンゴトンという独特な音を鳴らして走る電車で揺られながら、小毬は深い溜息をついた。

仕事に行きたくないなど思うことはあるけれど、ここまで朝の電車が憂鬱になったことはない。

今日だけは晴れていてほしいと心から祈っていたのに、天気は一個人の思いどおりになるものではないと思い知る。

窓を打ちつける雨粒を見つめながらもう一度溜息をついて、小毬は窓ガラスにコツンと額を当てた。

きつともうすぐ彼も電車に乗ってくるだろう。

昨日の今日で、どんな顔をして会えばいいのか、小毬は迷いに迷っていた。

雰囲気を押されて頷いてしまったものの、彼に何を教えられるのか、まったく思いつかない。

いきなり女心を教えてほしいなどお願いされ、小毬は以降ずっと食事の味がろくにわからなかった。

曰く、彼は、あれほど高スペックにもかかわらず、女性の扱い方がわからないらしい。

もう三十六歳になるのに、結婚できる気配がない。そろそろプライベートも落ち着きたいのでお

見合いなど、婚活をしてみようかと思うものの、女性の気持ちが理解できないのがネックになって  
いるそうだ。

女性が何にときめいて、男性のどんなところに惚れるのかがわからない。自分を好きだと言っ  
てくれる女性はいるが、その人達が本当に自分を好きなのか自信できないから、一步踏み込んだ交  
際に踏み出せないのだ、と。

あんなにいい男が恋愛ベタってどういうことだ。誰かと交際したことくらいはあるのだろうか、  
その経験を生かせばいいのに。

経験値は、柘二のほうが高いと思う。それなのに、小毬に女心の何を聞きたいというのか。  
昨日からずっと考えているが、結局答えは出ていない。

今の状態で柘二に会ったところで、何も教えられないのはわかっている。

そんな小毬の気持ちなどお構いなしに、電車は決められた路線を順調に進んでいた。

そして車内アナウンスがその駅名を告げる、心臓が大きな音を立て、小毬は少しだけ息苦し  
くなった。

電車は徐々にスピードを落とし、駅のホームに入っていく。

停車した電車のドアが開いて、小毬はそちらの方向へ視線を向けた。電車に乗り込んでくる柘二  
と、目が合う。

「おはよう」

「…………おはよう、ございます…………」

柘二はまっすぐ歩いてくる。

小毬は曖昧な笑みを浮かべてしまったらしい。

それは彼の心配そうな面持ちですぐにわかった。

「…………どうかした？」

「いいい、いいえ！ なんでも！」

「そう？」

柘二は心配そうなままだったが、それ以上は突っ込まないでいてくれた。

走り出した電車の窓の外をちらつと向き、彼はすぐに小毬の顔に視線を戻す。

「…………昨日はごめんね、急に呼び出して」

「あ…………いえ…………。私こそ、ご馳走様でした。…………すごく美味しかったです」

「そう言ってもらえると俺も嬉しいな。よければ、また誘ってもいい？」

「…………え、あ…………その、板倉さんがよければ、是非…………」

言い淀んでしまったのは、彼の言葉が社交辞令なのかそうでないのか判断がつかかねたからだ。  
だが、柘二の嬉しそうな笑みを見て、本心だったのだと気づく。

その屈託のない笑顔に、罪悪感を抱いた。

少し居心地の悪さを感じて、小毬は僅かに視線を逸らす。

「…………あの」

「うん？」

「……昨日の、話、なんですけど。……なんで私、なんですか？」

それはずっと疑問に思っていたことだ。その場では口に出せなかったが、今聞かなければ、流されるまま、できる自信もないのに彼の教育係になってしまう。

小毬の問いかけに、柊二は一瞬驚いたような表情になり、すぐに寂しげな笑みを浮かべた。「ずっと、話してみたかったんだ」

「え？」

「雨の日にはか乗らないけど、いつも坂下さんと一緒に電車で。ずっと話してみたかったんだ。いつも窓の外をじっと見えて、まるで雨音を楽しんでるみたいだなんて。雨の日なんてみんな嫌そうな顔してるのに、坂下さん、いつもニコニコしてたから。どんな子なんだろうなって気になって。話してみたかったんだ」

やけに嬉しそうな顔で笑われて、小毬はそれ以上何も言えなくなってしまった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

柊二と別れ、会社に着いた小毬は自分のデスクで溜息をついた。

「……あー……」

「……何、小毬ちゃん、顔色悪いけど大丈夫？」

「……大丈夫です……」

希美の言葉に返事をしながら、誰かに柊二のことを相談したい気持ちでいっぱいになる。

だが、彼から固く口止めされていた。確かに彼のように社会的な地位の高い人が恋愛ベタなど、知られたくないだろう。

未だ作業の進んでいないパソコンの画面を見つめて、小毬は痛くなってきたこめかみを強く指で摩った。

問題は目の前の真っ白なままのディスプレイだけではない。

今朝、小毬は柊二の依頼に頼ってしまった。そして、じゃあ早速、とやる気になった彼と今日の終業後に約束している。小毬はその誘いを断る術を持ち合わせていなかった。

柊二のことはまた後で考えよう。そう心の中で呟いて、シンデレラ・ハウスの資料とパソコンに向き合う。

気持ちを入れ替えて数時間。ラフはなんとか作れた。だが、やっぱりじっくりこない。

もう何枚作ったのか、シンデレラ・ハウスのデータフォルダは沢山の没データで埋まっている。他に急ぎの仕事がなくてよかったと、小毬は心の底から思う。

モデルがアクセサリーを身につけポーズをとっているものや、アクセサリー単体をクローズアップしたシンプルなものなど、数だけは作ったラフは、どれもこれもばつとしない。

いつもはこんなことまったくないのにどうしてだろう。

おまけに昨日はとんだお願いをされて、色んなことが頭からすっ飛んだ。仕事に集中できない。はあと深い溜息をついた時、パソコンと頭を軽く叩かれた。

「よう坂下。板倉社長のとこ、ラフの進捗どうだー？」

声をかけてきたのは、高畑だ。普段ならば頼もしいが、今はとても憎らしい。

「……進捗ダメです……」

「は？」

「……いや、作れることは作れるんですけど。なんかこうじっくりこないっていうか……」

「納得いかないってことか？ 珍しいなあ、坂下が。今幾つできてんの？」

「二十パターンですね。でも多分、どれもボツです」

「二十!? お前どんだけ作ってんだよ！ それだけあったら充分だろ！」

「でも、どれもじっくりこないんです。自分が納得いかないのに、そんな中途半端なものクライアントに出せないでしょう」

「まあそりゃそうだけども……。拘りがあるのはわかるけど、仕事には納期というものがあってだな……」

「……承知しております……」

変に拘りすぎているのだろうか。

けれど、作ったラフは何かが違う。やっぱりこれはまだ、先方には出せない。

小穂はまた溜息をついた。

「まあ、まだ時間があるからいいけど。板倉社長、お前に期待してるみたいだし」

「……う……」

高畑の言葉が肩にずっしりとのしかかる。プライベートは別として、本業でこそ終二の期待に応えたい。そう思うものの、現実は上手くいっていない。

こっちでも悩んでいるのが現状だ。

考えていても埒が明かないし、今の小穂にできるのはとりあえずラフを作ることだけ。もう少しやってみるかと姿勢を正した時、後ろにいた高畑が「あ！」と声を上げた。

「そーだ！ じっくりこないってんなら、現物見せてもらうか？ なんかイメージみたいなの湧くんじゃねえの？」

「……現物？」

「そう。やっぱちゃんと見てると見てないのとじゃ違わねえ？ もしその気があるなら板倉社長に連絡取ってみるけど」

高畑の言葉に、確かにそのとおりだと思った。

キッチンと本物を見て、触れて、確かめれば何かマシなアイデアが浮かぶかもしれない。インスピレーションとまでは言わなくても、とっかかりは掴める気がする。

小穂が顔を上げて口を開きかけた瞬間、希美から声をかけられた。

「小穂ちゃん、今日は用事があるから定時で帰らなきゃいけないって、朝言っただけ？ もう六時だけ大丈夫？」

「ああっ！」

終二との約束をすっかり忘れていた。



どれだけ急いでも待ち合わせの時間に五分ほど遅れてしまう。

小毬は息を切らせて、待ち合わせ場所に向かった。案の定遅刻し、小毬が着いた時には、柗二はもう来ていた。

「ごつごめんなさい……！　じ、時間……！　き、気がつかなくて……！」

「大丈夫だよ。俺もついさつき来たばかりだし。坂下さん、まず深呼吸しようか」

そう言っつて背中を摩さすつてくれたのは、小毬が見苦しいほど息切れしていたからだろう。

元々インドアな小毬に、それほど体力はない。おまけに会社から猛ダッシュで電車に飛び乗り、降りてからも全速力で駆けてきたのだ。

息切れはすぐに収まらず、柗二に申し訳ないやら恥はずかしいやらで言葉が出てこない。

漸よく息が整い落ちてきていても、柗二の顔をまっすぐ見られなかった。

「今、仕事忙しいの？」

問われた言葉にもなんと答えればいいのかわからなくて、口ごもってしてしまう。

忙いそしくはない。ただ、ポンコツになっているだけだ。いつもならパンツと出てくる案が思い浮かばず、どうにかしなきゃと焦るあまり、時間を忘れていた。

「あ……い、いえ……そうじゃ、ないんですけど……ちよつと悩んでたっつていうか」「悩む？」

その仕事をくれた本人に、「ラフが納得いかなくて」などと語るわけがない。

小毬は曖昧あいまいにヘラツと軽い笑みを浮かべたが、柗二には勘かづかれてしまった。

「——もしかして、うちの仕事？」

「うえ……!?　あ、い、いいえ、いえ！　違います！　ちよつと、色々あって！」

慌あわてて大声で否定する小毬に、柗二は一瞬目を見開く。そしてすぐに困こつたように笑った。

「……坂下さんは、嘘うそがヘタだね」

「う……、いや……その……」

小毬のごまかしはあつさり見破やられたらしい。こうなつては仕方ないと、小毬は小さく息を吐く。「すみません……なんか、どうにもしっくりこなくて」

「そうなんだ……。ごめんね、面倒な仕事、頼んで」

「あ！　いえ、全然面倒とかじゃないんです。本当に！　板倉さんが私の作った広告を好きだつて言ってくれたのは本当に嬉うれしかったし、頑張りたいと思つてるんです。ただ、自分が納得してないものをクライアントの方に見せるわけにはいなくて……それで少し煮詰こまっちゃつて。いつもはこんなことないんですけど……」

「……もしかして俺が、変なこと頼んだせいかな？」

そう問いかけてきた彼の声がどこか沈しずんでいるように聞こえる。小毬は慌あわてて首を横に振った。

「違います、それは関係ないです。ほんとに！」

元々、柗二の願い事を聞く前から煮詰こまっていた。確かに戸惑とまつてはいるが、それと仕事とは関係ない。

小毬がそう否定すると、彼は安心したような笑みを浮かべて、息を吐いた。

「いつもはそんなことないっていうのは、普段ならもつとぼつとしつくりくるデザインが浮かぶってこと？」

「……まあ、そんな感じです。調子がくるってるのかなーとは思ってますけど、何が原因なのかわからなくて……」

「そうなんだ……」

高畑に現物を見たらと提案されているが、プライベートな時間である今、柊二にそれを頼むのはなんだか気が引ける。仕事をプライベートに持ち込まない。きちんとした手筈で依頼するべきだ。

小毬はそう考えて、口に出すのはやめた。

「……頑張ります。クライアントの方にも満足してもらえるもの、作りたいし」

「……そっか」

「その、デザイン、好きだからって依頼してもらえたの、初めてだし、嬉しかった、ので……」

「うん、俺が坂下さんのデザインが好きで依頼したのは本当のことだよ。プレッシャーかけて申し訳ないんだけど、期待してる。……そろそろ行こうか。店、予約してあるんだ」

「……もしかして、またお高いお店ですか？」

小毬が心配したのは食事代だ。昨日も柊二にご馳走になってしまっている。奢らればなしというのは申し訳ない。

小毬が問いかけると、柊二は少したじろいだ。

「それほど高い店ではないと思うけど……あ、もちろんご馳走するから、坂下さんは心配しなくて

も大丈夫だよ？」

「そういう問題ではなくてですね……。あの、もし、これからもこうして会うなら、お店は普通のところにしませんか？　ちゃんと割り勘で。奢られるのが当たり前だとは、思いたくないんです」

「……坂下さん」

「仕事とは関係ない、板倉さん、最初にそう言いましたよね？　……それなら、今この時間はプライベートってことじゃないですか。友達だったら、割り勘するのが普通でしょう？」

小毬の言い分は、柊二を驚かせたようだった。彼は一瞬固まって、だがすぐに、小さく笑う。

「そうだね。お友達なら、確かに割り勘だ」

「金銭面のことは、その人達なりの決め事だろうから、恋人同士については何も言わないですけど。……ちゃんとした恋愛するなら、そういうところは気にしたほうがいいと思いますよ」

自分の言った言葉がなんだか急に恥ずかしくなって、小毬はわざとらしく視線を逸らした。

確かに恋愛事の先生役を頼まれているが、小毬は柊二よりも年下だ。ご高説をたれるなんて何様だと、急に羞恥心がこみ上げてくる。

けれど柊二は気を悪くした様子もなく、身をかがめて小毬の顔を覗き込んだ。

「うん。今度から、ちゃんとそうする。……ちなみに、坂下さんはどっちなんでしょう？」

「……え？」

「坂下さんは恋人にご馳走してもらったほうが嬉しい？　それとも割り勘？」

「えっ、と……ど、どうでしょう……？　わ、私は変な遠慮とかしたくないし、……対等な関係の

ほうが、いい、ですけど……」

「なら、今度から、そうしよう。散々自分から振つといてあれなんだけど、仕事の話もなるべくしないようにしようか。坂下さんも、プライベートに仕事、あんまり持ち込みたくないよね」

「……はい？」

終二の質問の意図も、今嬉しそうに笑っている理由も、小毬にはさっぱりわからない。

首を傾げている小毬をよそに、終二は相変わらずににこにこ笑ったまま、予約しているという店に促した。

店に入ってメニューの値段を見ると、とてもじゃないが小毬が支払えるような金額ではない。改めて、次からはきちんと割り勘にできるお店にすると、終二に約束させた。

こういう時、大人しく奢られて、「美味しかったです、ご馳走様でした」と言える可愛げがあるなら、きつと独り身ではない。そう考えるとなんだか言いようなない虚しさで悲しさに襲われる。

少し凹みながらメニューを眺めた。そんな小毬の様子を終二は一切気にしていない。

彼は少し変わっているのかもしれないと、小毬は心の中で失礼なことを考えた。

注文を終えるとすぐに、運ばれてきたビールでグラスを軽くぶつけ合う。

「今日は車じゃないんですか？」

「うん。せつかく坂下さんとお約束してるのに、一緒にお酒を飲めないのはと思って」

「そ、そうなんですか……」

なんと答えていいのかわからない。

小毬はキンキンに冷えたビールを口に流し込んだ。独特の味が口内に広がって、そのまま喉を滑り落ちていく。

グラスを置いて顔を上げると、終二はお通しのおひたしに箸をつけている。高級感が漂う器が目につき、小毬はふと、気になったことを聞いてみた。

「板倉さんは、いつもこういうところでお食事されてるんですか？」

「ああいや、いつもはチェーンの居酒屋とかだよ。会社の人間と飲みに行くことが多いから」

「へえ……。……。えっ、じゃあ私も、次からそういうところでもいいですか！ ほんとに！」

「うん、そうする。……。ただ、お世話になるんだから、やっぱり礼は尽くさないと、思ってたさ」  
少し寂しげな顔をされて、小毬の胸が小さく痛んだ。けれど、まだ小毬に何かができるかわからない。始まってもないことに礼を尽くされても困る。

仕事上の立場でも、小毬が終二を接待する側だ。毎回こんな高級なお店に連れてこられたら恐縮してしまって味わうどころの話ではない。

「そこまでしてもらわなくても大丈夫ですよ……。むしろ申し訳ない気持ちでいっぱいになるので、本当、普通でいいですから……！」

「承知しました」

クスクスと楽しげに笑われて、なんだか恥ずかしくなってきた。

年上の彼から見たら、子供っぽく見えてしまうだろう。

さらに居心地が悪くなり、そんな気持ちをごまかすように、小毬も料理に箸を伸ばした。